

感染症ニュース



研究の紹介

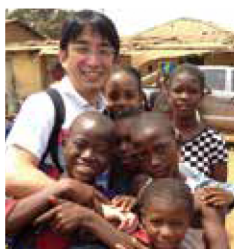
今回の「感染症ニュースVol.1」から、長崎大学高度感染症研究センターの研究や研究者を紹介するコーナーをスタートします。初回は、新興ウイルス研究分野の安田二郎教授です。

ウイルス感染症は、人類の誕生以来常に人類にとって対応困難な大きな脅威として存在してきました。既存のウイルス感染症だけでなく、エボラ出血熱やCOVID-19のような新興ウイルス感染症と呼ばれる新たな感染症も次々に現れ、人々の健康や生命を脅かし、また、社会機能や経済にも大きな影響を及ぼしています。

私たちの研究室は、教育・研究を通じて、このような新興ウイルス感染症の克服に貢献することを目的として活動をしています。具体的には、抗ウイルス薬・治療薬の開発、診断法の開発、ウイルスが細胞や体の中でどのように増殖し、どのように病気を起こすのかの解明、人に病気を起こすウイルスがどこにどのような状態で存在しているのかの調査などを行っています。

診断法の開発に関しては、2014-16年に西アフリカでエボラ出血熱の大流行が発生した際に、私たちが企業と開発した診断キットが日本政府からの緊急無償支援としてギニア共和国に供与されており、現地の検査者の訓練も行いました。

2015-16年にブラジルを中心にジカ熱の流行が発生した際にも…………… (P4に続く)



BSL-4 Report から感染症ニュースへ

これまで地域連絡協議会での意見交換等の様子は「BSL-4 Report」でお伝えしてきましたが、ご案内のとおり、今年4月に高度感染症研究センターが設置されました。そこで、センター設置を契機にこれまでの地域連絡協議会のご報告に加え、センターで行われている研究の情報や感染症に関する身近な話題を紹介する地域広報誌「長崎大学高度感染症研究センター 感染症ニュース」として、内容を充実させてお届けすることにいたしました。

出航式の開催

長崎大学感染症研究出島特区と高度感染症研究センターの「出航式」を、令和4年9月26日に坂本キャンパスで行いました。

式辞で河野茂学長は「感染症研究出島特区では学内に分散していた感染症研究資源を統合的に運用し、基礎研究から臨床研究、医薬品開発に関する一連の感染症研究の強化・効率化を推進し、高度感染症研究センターではBSL-4施設をコアとして基礎から応用に至るまで、全国の研究者に開かれた研究拠点とすべく努めていきます。安全性を最優先に本格稼働に向けた準備をしています」と挨拶しました。井出庸生文部科学副大臣、大石賢吾長崎県知事、田上富久長崎市長より祝辞を頂戴しました。

森田公一特区長は「大学のリソースを有効に使うため、横つなぎの組織として設立しました。ウイルスや病原体に迅速に対応するシステムを作りたいと思います」と述べました。柳雄介センター長は「海外にはエボラ出血熱などの重篤な感染症があり多くの患者が出ています。また、旅行者や帰国者が国内で発症する可能性もあります。研究によって人類の健康と安全へ貢献することが目標です」と話しました。

当日は、自治会長など地域の方々も含め約120名の出席がありました。



詳しくはこちら



<https://www.ccpid.nagasaki-u.ac.jp/20221031-2/>